

学校プラットフォームの要素としての学校朝食についての一考察

山口県内の2つの市における実践を手がかりに

川崎 徳子・大塚 類*¹

A study of school breakfast as an element of the school platform:
based on practices in two cities in Yamaguchi Prefecture

KAWASAKI Tokuko, OTSUKA Rui*¹

(Received December 14, 2023)

キーワード：学校プラットフォーム、学校朝食、山口県

はじめに（本稿の目的と構成）

本稿は、山口県内における学校朝食の実践、つまり、学校の敷地内で児童生徒に朝食を提供する実践についての調査報告を目的としている。こうした学校朝食の試みは、子どもの貧困対策としての「学校プラットフォーム」の一翼を担うものである。以下、第1章では、山口県内における学校朝食の具体的実践を紹介する前段階として、学校プラットフォーム¹と学校朝食の概略を説明する。第2章と第3章では、山口県内の宇部市（第2章）岩国市（第3章）における学校朝食の実践について紹介する。第4章では、ふたつの事例をふまえて、学校朝食の実践と継続の難しさと展望について考察する。

1. 学校プラットフォームとその一要素としての学校朝食

1-1 日本における学校プラットフォーム

2013年6月に成立し、2014年1月に施行された「子どもの貧困対策に対する大綱」²のなかの子供の貧困対策に関する基本的な方針の5において、学校プラットフォームについて以下のように述べられている。「教育の支援では、『学校』を子供の貧困対策のプラットフォームと位置付けて総合的に対策を推進するとともに、教育費負担の軽減を図る」。

この大綱を策定する内閣府の検討会の委員も務めていた山野則子は、学校プラットフォーム研究の第一人者である。彼女は、学校プラットフォームという考え方を次のように定義している。「学校を、子どもの貧困をはじめとするさまざまな課題の発見から支援まで立ち向かえるためのプラットフォーム（＝基盤）として位置付けていく考え方である」（山野2018, p.2）。彼女は、学校プラットフォームを次のように図式化している（同, p.184）（図1）。

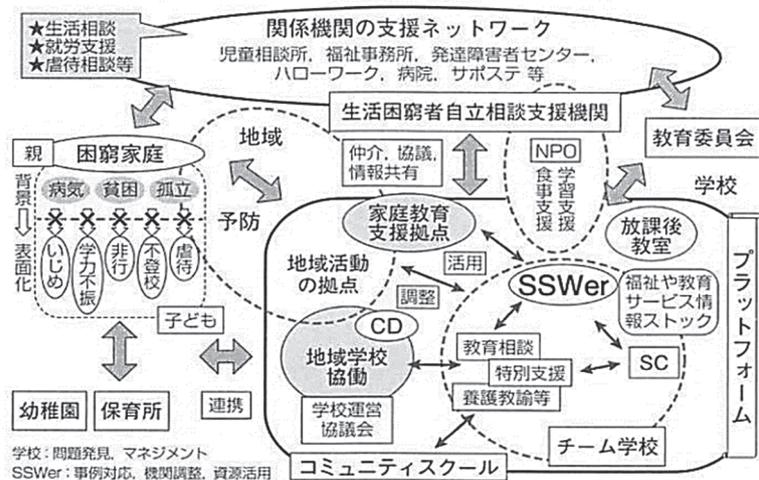


図1 山野の考える学校プラットフォームの組織図

* 1 東京大学大学院教育学研究科

この組織図では、コミュニティ・スクールがプラットフォーム機能を果たすことが想定されている。チーム学校という組織のもと、スクールソーシャルワーカー（SSWer）とスクールカウンセラー（SC）が、養護教諭や教職員と協働し、教育相談や特別支援に取り組む。学校プラットフォームは、放課後教室、学校運営協議会との地域学校協働、地域における家庭教育支援拠点、地域のNPOによる学習支援や食事支援も含みこむ。こうした地域の活動拠点との関係調整や資源の活用を担うのが、スクールソーシャルワーカーである。本稿が注目する学校朝食の試みは、地域のNPOによる食事支援のひとつに位置づけられる。

1-2 イングランドとアメリカにおける学校プラットフォームに類する制度

学校プラットフォームに関する研究で必ず紹介されるのがイングランドにおける「拡大学校」（Extended schools and services）と、アメリカにおける「学校と連携した統合的サービスプログラム」（School-linked integrated services program:SLIS）である。

イングランドにおける Extended schools and services（拡大学校・サービス）は、2005年ブレア労働党政権下で、貧困対策の一環として制度化された。学校の中で朝食クラブや母親の就労支援や学童保育、文化的活動なども含め、子どもや若者、より広い地域社会に対してさまざまな課外サービスを提供している。政権交代後の現在も、主要な支援は継続中である。小中学校には地域に暮らすすべての子どもが通うからこそ、そうした学校に多様な支援やサービスを組み込むという考え方が、Extended schools and servicesと学校プラットフォームに共通する考え方である。

Extended schools and servicesの多様な支援のなかでも、本稿が注目したいのは、全国学校朝食クラブプログラム（National school breakfast club programme）である。このプログラムに参加する学校は、学校朝食クラブの食材費と配送費の75%を国から補助される。学校が負担するのは、残りの25%である。こうした仕組みによって、このプログラムに参加する学校で希望する全児童生徒が、家庭による経済的な負担なしに、学校で毎日朝食を食べることができる³。筆者たち科研チームは、数年前に、イングランドの南部にある公立小学校での調査で、学校朝食クラブを見学したことがある。その小学校では、始業前に多くの子どもたちが、体育館で朝食を食べていた⁴。

次にアメリカに目を向けよう⁵。「学校と連携した統合的サービスプログラム」（School-linked integrated services program:SLIS）は、1990年代に、アメリカで連邦あるいは各州レベルの政策として採用された。Extended schools and servicesや学校プラットフォームと同様、SLISは、これまで、教育・医療・福祉といった複数の機関がそれぞれに担ってきた貧困家庭・児童生徒への支援を、学校という場で包括的に提供しようとする試みである。SLISの支援のなかにも、貧困家庭の児童生徒を対象とした補食プログラムがある。その一環として、学校朝食が提供されている学校もあるという。

1-3 学校プラットフォームの一要素としての学校朝食

国立教育政策研究所が実施している全国学力・学習状況調査の質問紙調査⁶には、「朝食を毎日食べている」という項目がある。令和3年度の調査では、この項目に「はい」と答えた小学生が85.8%、中学生が81.8%であり、毎年減少傾向にあることが問題視されている。こうした社会背景のもと、家庭外での朝食提供の取り組みが全国に広がってきている。

1-3-1 学校外での朝食提供の試み

日本ケロッグが昨年から取り組んでいるのが「ケロッグ 毎日朝ごはんプロジェクト」である。「全国こども食堂支援センター むすびえ」と協働し、むすびえと提携しているこども食堂で朝食（コーンフレーク）提供が試みられている。ケロッグ社は、今後の目標として、2030年までに全国47都道府県のこども食堂で同プロジェクトを展開することを掲げているという。当該プロジェクトを取材した記事⁷のなかで例として挙げられている子ども食堂カフェ北野⁸では、地域の朝ごはん食堂「きたのあさごはん」を毎朝実施しており、学生までは無料で朝食が提供されている。

1-3-2 全国に展開する学校朝食の取り組み

次に、学校朝食、つまり、学校の敷地内での朝食提供の取り組みについて見ていきたい。

- ・大阪府での取り組み

民間・行政主導で多くの取り組みが実現しているのが、大阪府である。さまざまなメディアに取り上げられるなどして特に有名で継続的な取り組みが、大阪市立西淡路小学校の「朝ごはんやさん」の取り組みである⁹。小学校の家庭科室で、基本的に月水金の週3回実施されている。連合町会長、地域活動協議会会長、更生保護女性会会長、地区社会福祉協議会会長、保護司、民生児童委員の現職である表西弘子さんが主導し、2016年から継続している。

堺市立福泉東小学校では、地域に協力を呼びかけ、2017年5月から月1回、学校の隣の集会所で100円の朝食を提供している。学級通信などで参加を募り、当日来ていない子は、教員が自宅に迎えに行く。朝食を学校に食べにくるというインセンティブによって、遅刻の防止にもつながっているという¹⁰。

泉佐野市の市立小学校二校では、週2回の朝食無償提供が、市の実証事業として2023年2月から実施されている¹¹。1日あたり60～80名の児童が利用しており、好評のため2023年6月末まで延長することになったという。9月からは対象校を4校に拡充して実施されている。対象校のひとつである市立北中小学校のウェブサイトには、家庭科室で実施されている「朝食堂」の様子が紹介されている。

・その他の地域での取り組み

大阪府以外の自治体でも、学校朝食の試みが広がっている。例えば、広島県では、2018年11月から、朝食を無料提供するモデル事業を廿日市市立阿品台東小学校で始めた。調理せずに食べられる食品をメーカーなど13社が提供し、地元のボランティアが配膳を担ったという¹²。

東京都の三鷹市では、学校施設が地域の共有地「コモンズ」として地域の人財や資源が集う場所となることを目指して、地域と連携・協働した学校施設の活用が推進されている。その一環として、鷹南学園三鷹市立中原小学校の家庭科室を活用した、NPO法人による無償での朝食提供の試みが、現在も月1回の頻度で実施されている¹³。

栃木県宇都宮市の宇都宮海星女子学院中・高では、月1回、朝食を生徒に無償提供する「朝ごはんカフェ」を実施している。同校が力を入れているSDGs（持続可能な開発目標）の取り組みの一環として、食品ロス削減を考え、学び、体験する場となっているそうである¹⁴。

神奈川県教育委員会では県立高校4校（県立田奈高校、県立大和東高校、県立相模向陽館高校、県立津久井高校）において、様々な事情から朝食を摂る習慣が無い高校生へ、朝食を提供する事業に取り組んでいる。5校目の拡充に向けて、教育委員会のウェブサイトにて寄附を募っているが10月31日現在で寄附はいまだ0円である。学校朝食の取り組みの重要性に関する認知度は低いと言わざるを得ない¹⁵。

以上、本章では、日本における学校プラットフォームの概要（第1節）、イングランドとアメリカにおける学校プラットフォームに類する制度（第2節）、そして、日本全国で展開する学校内外における学校朝食の試み（第3節）を紹介してきた。続く第2章では、山口県内の宇部市における学校朝食の実践を紹介する。

2. 宇部市での取り組み（関係者平野さんへのインタビューより）

本章では、2019年の9月から2020年の3月までの期間、地域の公立小学校で実際に学校朝食を行っていた団体の関係者である平野さん（仮名）へのインタビュー調査の結果をもとに、この取り組みについての概要説明と分析を行う。

2-1 インタビュー調査の概略

2-1-1 インタビューへの経緯とインタビューの協力者について

宇部市の公立小学校で行われていた学校朝食は、小児科の開業医の金子淳子さんが子育て支援から子どもを取り巻くさまざまな課題を地域でサポートするための事業の一つとして取り組まれていたものである。

金子さんのクリニックでは、2014年から子どもの居場所づくり等を目的にキッズクラブの活動を開始、まちなかの活動拠点として、学びと遊びの場の提供や母子のメンタルヘルスケア、商店街の活性化にも関わる地域とのつながりを始めとした活動を展開されている。さらに2017年からは子ども食堂を主導的に運営され、隔週水曜日、毎回約300名程の参加がある活動として、子どもから高齢者まで幅広い世代が集える場が開かれている。また、2018年からはアウトリーチ事業の宅食・宅配プロジェクト、2019年から子どもの学習

支援・生活支援の活動に並べて進められたのが学童での昼食提供、そして、本稿で取り上げる学校での学校朝食である。これらに加え、家庭的なリスクも含め、様々な困難を抱える子どもたちが、安心して過ごせる環境を支える事業として、2021年に日本財団が全国に広げている「子ども第三の居場所」の宇部市の拠点となる団体を設立し、行政、NPO、市民、企業、研究者等と協力しながら、誰一人取り残されない地域子育てコミュニティを目指した活動も進められている。

本研究で宇部市の活動を取り上げたのは、この活動の中心的役割を担われている小児科医の金子さんと筆者が、研究や地域活動等でのつながりがあり、筆者自身も「子どもの第三の居場所」の宇部市の拠点の団体設立にも関わったことや、金子さんからこれらの活動に実際に関わっている平野さんへのインタビューを提案していただいたことに発する。本調査への協力を得た平野さんは、金子さんのクリニックを基盤としたキッズクラブの活動から、子ども食堂、子どもの第三の居場所事業まで、金子さんの活動の実務的な協力を続けられている方である。

2-1-2 平野さんへのインタビューの方法

宇部市の小学校での学校朝食は、小児科医の金子さんが主導する子どもの支援の取り組みの一つであったが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大のために中断された活動である。このインタビュー調査を行った時期、平野さんは「子どもの第三の居場所」一般社団法人キッズラップ（以下キッズラップ）の活動に関わられていたこともあり、インタビュー調査はこのキッズラップの一面で行った。

調査の実施は、2023年の5月、時間は1時間。事前に質問内容を策定し、半構造化面接の形を取りながら、自由に語ってもらう雰囲気、川崎・大塚の2名が行った。インタビュー内容は、平野さんの了解を得たうえで、手書きの記録とICレコーダーに録音し、後日、録音内容を逐語録として書き起こし、内容を整理、分析した。尚、前述の通り、学校朝食は、現在は行われていないため、平野さんへのインタビュー調査は、活動当時の状況を回想してもらう形での聞き取りである。

2-1-3 倫理的配慮

平野さんには、インタビュー調査を行う前に、本研究についての説明と、研究への参加の同意を得ている。

2-2 インタビュー内容の整理と分析について

インタビュー調査の内容は、平野さんの語りの時系列の中に表れてきた事前に策定した質問内容に応じた内容である「宇部市で実施された学校での学校朝食の具体的な活動の内容や状況」「学校での学校朝食の課題、活動の再開や継続の難しさ」とともに、「実際に行われた活動を平野さん自身が語りながら振り返られたことから語られているもの」があった。そこには、「活動の目的や意義」の表層的な面と、この活動を通して見えてくる子ども支援に潜在的に続いていく「活動の目的や意義」である。

以下、平野さんの語りを取り上げながら、それぞれの内容を整理し、考察していく。

2-3 平野さんの語りより

2-3-1 宇部市で実施された学校での学校朝食の具体的な活動の内容や状況

この活動の概要は、2019年の9月1日スタート、2020年の3月27日に中断、実質中止の状態。小児科医の金子さんが校医として関わられている小学校3校で学校朝食実施。もう1校は、学童での昼食サービスとして行われ、小学校での食事の提供は、計4校で行われた。そのスタートは、校長先生が金子さんと同級生というつながりのあるH小学校から始まる。全校児童に告知して、申し込んだ人（プリント）に朝ごはんを提供。他の小学校も同じように申し込みを受けての対応である。

・小学校の中での活動と場所について

H小学校では、集団登校の曜日で週1回実施（学校とのつながりで順調に行かないときもあったようである）。場所は、コミスク（コミュニティ・スクール）の部屋と呼ばれている普段は使われていない空き教室。他のK小学校もN小学校も校舎から離れた場所の空き教室を借りて実施。活動日の朝、職員に教室の鍵を開けてもらうか鍵を借りて開けて、活動し、片づけ、掃除まで終えて終わったら鍵を閉めてもらうか鍵を返すという形で活動が行われている。

6、7 時ぐらいだったかな、学校の方に行って、そこに職員の方がいらっしゃるの、今から教室を使用させてくださいって言って鍵を開けていただいて、そこで私達が、炊飯器とか、味噌汁とか、そういったものを。おにぎりだけは教室で作りましたけれども、あとは全部、作ったものを持って行って、全部配膳してっていう形でやりました。

H 小学校もそうだし、K 小学校もそうですけど、まず一番最初に職員室に行って鍵をいただくんです。で、鍵をいただいて教室を開けて、また終わった鍵を返しに行くって鍵だったんです。だからできたのかもしれないですね。

全部もう何もそこではただ食べるだけっていう形にして。だからできるだけ多分最初はあまり学校に負担がかからないような形にすると受け入れも良かったんですけど。

学校でのこうした活動を行う際に、校内の教室等の使用が可能かどうかということが、第一に活動が出来る否かを左右する点だと思われる。実際、現在の学校では、安全管理のために校舎等建物の施錠も集中管理のシステムで制御され、その開閉も学校の職員の対応が必須である。そのため、職員の勤務時間外と思われる学校朝食を行う時間帯に校舎の開閉が必要となる教室の使用は難しいということが伺われる。学校朝食の行われた3つの小学校には、いずれも使用する教室での鍵の開閉が可能な場所があったので、学校の職員との関わりも鍵の借用のみで、教室を使用ができたことは活動を可能にした重要な点であると思われる。

もう一つは、活動で必要なもの（食べ物も食器等）は、基本的には全て持ち込みだったということも活動をスムーズに進めている。

2-3-2 学校朝食での食事の内容からつながり見える支援の様相

学校朝食の献立は、おにぎり3種、ウィンナーなどのおかずと温かいお味噌汁。食材は、地元の味を生かした内容である。また、活動先に炊飯器を持ち込み、おにぎりはそこで作る。お味噌汁もIHで温めて温かくして提供されている。こうした提供している食事の内容から、金子さんが主導して進められている子どもの支援への思いや活動からつながる踏み込んだ援助への手がかりを創り出す役割が見えてくる。

平野さん自身も活動先で、おにぎりの調理をされたり子どもたちと直接関わられたりしていることから、実際の活動の様子も体験的な実感から語られている様子が伺えた。

はい。もう全部。これは学習室で使ってたものだったので、そのままお皿とおかずと、炊飯器をもって。山口県は萩にあるしそわかめ、がありますよね。…あとシャケのおにぎり。真っ白のがいいっていう子もいたので、何にもないブレーンのおにぎりをつくらせて。おにぎりは大体3種類、しそとシャケと白。

だからもうお味噌汁も、もうできるだけ温かい状態で提供したいっていうんで、IHを持って行ってそこで温めて電気で温めて、温かいものは温かいので提供っていう…。

朝食を提供するという活動であっても、どのような実践がなされているかということに、活動それ自体の役割とそこからつながる支援の広がりや支援への手がかりが見えてくる。

この活動では、現場でご飯を炊き、できたてのおにぎりを提供することや、子どもの要求を取り入れたおにぎりの種類、温かい状態で提供されることによる食事の温かさと食事の場の雰囲気など、提供者の配慮には、食事に対する思いや子どもの過ごす環境として食事を通して育まれるものを見据えた家庭的な支援を支えるものが提供されていることが受け取れる。この団体の活動の意義を平野さんをはじめ、活動に関わるスタッフが了解していることも、朝食の提供という表面に見える活動の姿だけではない活動の意義を創り出しているものと考えられる。これらは、学校朝食を受けた子



図2 みんなで朝ごはんの報告

もと保護者へのアンケートの結果（表1）にも表れている。

表1 6月13日みんなで朝ごはん！の感想

<p>低学年感想(保護者)</p> <ul style="list-style-type: none">・初めての参加でしたが、子どもが「とてもおいしかった。また参加したい」と言っていました。毎日朝ごはんを食べていますが、<u>友達と食べるということが嬉しかったようです。</u>朝早くから作っていただきありがたく思っています。定期的にあると学校に行く楽しみが更に増えるように感じます。(無理は承知ですが・・・)(1年)・毎回楽しみにしています。いつもありがとうございます。(1・3年)・毎回、とても楽しみにしています。<u>この日だけは朝起きるのが早いです。</u>いつもありがとうございます。(1・2年)・家でも毎日朝ごはんを食べますが、起きてきた人から食べるので時間帯がバラバラで個食みたいな感じなので「みんなで朝ごはん！」はおいしいし、楽しいようで「また、行きたい！」と毎回言ってます。なるべく食べれるといいのですが、<u>家族みんなそろって食べれるようにがんばりたいと思います。</u>(2・4年)・6月13日に参加できなかったのも、とても楽しみにしています！！(1年)・朝起きるのが苦手な娘ですが、<u>みんなで朝ごはんの日だけはすごく楽しみですんなり起きてくれます。</u>帰ってからもすごく楽しそうにメニューや誰と食べたかなど話してくれます。ありがとうございます！！(2年)・とても美味しかったと、すごくよこんでいました。次回もとても楽しみにしています。よろしく願いいたします。(1年)・いつもおいしい朝ごはんを用意していただき、ありがとうございます。子ども達も毎回楽しみに参加しています。<u>友だちと楽しく食べることで、今日もたくさん食べたよと聞きます。</u>朝ごはんをしっかり食べると、授業にも集中できるので、とてもいいことだと思えます。これからも続けていただけたらうれしいです。(3年)・「みんなで朝ごはん」の日は喜んで2人とも元気よく家を出て行きます。<u>いつも朝ごはんを食べ終わるのに時間がかかり全部食べられない下の子ども、この日は「全部、食べた！」と得意気に話し、「楽しかった！」と言います。</u>朝からきちんとご飯を食べることができるだけでなく、<u>楽しい時間がひとつ増えたことに感謝しています。</u>ありがとうございます。(2・3年)・とても美味しかったと、喜んでいました。朝からなかなか、おわかりする事はないのですがたくさん食べた様でありがとうございます。(1年)・家ではいつも朝ごはんは少ししか食べないのですが、前回参加させていただいた時は帰ってきて「今日の朝ごはんおいしくておかわりしたよ！」と嬉しそうに教えてくれました。ありがとうございます。(1年)・前回、初めて参加させていただきました。「〇〇くんのお兄ちゃんと一緒に食べた！」「みそ汁も全部たべた！」と<u>楽しそうに話してくれました。</u>このたびも“みんなで朝ごはん”行く？と聞くとすぐに行く！と言っていました。<u>親としてもバランスの良い朝ごはんの提供に感謝です♪</u>学童でも用意していただき大変ありがとうございました。 <p>感想(子ども)</p> <ul style="list-style-type: none">・おいしかったです。ありがとうございました。(1年) ・いつもおいしいごはんをありがとうございました。(2年)
<p>高学年感想(保護者)</p> <ul style="list-style-type: none">・前回初めて参加させてもらいました。毎日朝ごはんを食べていますが、<u>みんなで食べるご飯はとてもおいしかったようです。</u>ありがとうございました。(6年)・家では朝はパンが多いので、<u>おむすびがとてもおいしかったと言っていました。</u>家でも朝ごはんをおむすびにしようかと思っています。(5年)・いつもおいしい朝ごはんを用意していただきありがとうございます。毎回、喜んで参加しています。(5年)・今回2回目です。<u>前回行っておいしかったーって言ってました。</u>いつもより遅い時間なのでお腹もすごく空いているのだと思います。(5年)・今回で何度目か忘れましたが、毎回終わった後の話になります。「すごーく、美味しかった！！」って笑顔で話してくれます。毎日、家で朝ごはんを食べて学校に行くのですが、私もバランスを考えて出しています。<u>でも多くの人たちと食事をするのがすごく嬉しいのと出されたものがすごく美味しいのとで本当に楽しみにしているイベントです。</u>これからもあれば嬉しいです。(6年)

表1の学校朝食に参加した保護者の感想には、「美味しかった」など、子どもが家庭で保護者に『みんなで朝ごはん』でのことを伝えていることが表わされている。この感想からは、家庭の状況はわからないが、少なくとも学校朝食を利用することを希望した家庭であり、学校朝食に参加したことによって、家庭で保護者と子どもとの会話がなされたことが伺える。さらに、感想の中には、子どもの言葉から受け取る学校朝食の様子から、保護者自身が家庭での生活を振り返ったり、生活に生かしていこうとしたりすることが期待されることも受け取れる。例えば、「…起きてきた人から食べるので時間帯がバラバラで個食みたいな感じなので、…家族みんなそろって食べれるようにがんばりたい…」など、一緒に食べることの楽しさを感じた子どもの姿が、いい意味で保護者に家庭での食事への意識へ影響を与えている可能性があったことや、その他、バランスの良い食事を見直すこと、朝ごはんをしっかり食べることが授業の集中にもつながることなど、子どもの言葉や姿が保護者に考える機会などを生み出していることが受け取れるのである。

これらは、学校朝食から広がる子ども支援や子育て支援へのつながりの可能性でもある。

2-3-3 学校朝食からつなぐ支援や役割

小児科医の金子さんが取り組まれている事業の様々な活動は、いずれも子どもの支援を目指すものであり、小学校での学校朝食も小学校でやることによって支援を必要としている子どもへのアプローチの一つとして開かれることを期待した活動であることが受け取れる。それは、活動のスタッフである平野さんの思いにも表れている。これらの活動の目的や意義とその可能性を創り出すために、金子さんが、スタッフの関わりや在り方への投げかけを欠かさず、丁寧に意識の共有がなされるように導かれていることから伺える。

たぶん、金子先生もそうだと思います。だから、スタッフには、たぶん、どんな様子だったっていうのを聞かれてたと思うので。…みんな集団登校なので、集団で来るんですけども。やっぱり、人、自分の好きなところで食べるんですよ。やっぱり仲の良い友達はそれにかたまるんですけども、その中にポツンと離れてる子がいるんです。この子は学校でも厳しい状況にあるのかなと思ったりとか、なかなか学校に足が向かないっていう子も中には、この子そうなんじゃないかなあって、無理して今日は来たんかなっていうようなそんな感じの子たちもいたので、そういうときは金子先生に報告をして、こんな感じの子がいましたよって。だからそれがそれとなく気にかけて…。

……やっぱり、子ども食堂もそうだったんですけど、…、やっぱりベースとしてはその中に困りごとを抱えてる人が必ずいるので、そこに目を光らせるっていうのが、スタッフの役目だと思っているので。だからもう万全にただ単にご飯を提供するっていうだけじゃなくって、周りもちゃんと見つつ、何かこう何か感じるものがありますよね。そういうもんで、ちょっと気にかけておくっていうのがやっぱり必要なのかもしれないなとは思いつつ、やってみましたけれども。

平野さんは、これらの活動において、学校朝食に訪れる子どもに出会うこと、そこでの子どもの姿から、子どもの居る環境や子どもの生活、心理的な状況から抱えている課題などにも触れられるように、しっかりと子どもの様子を見つめられている。そして、子どもと関わっている時間、ここでは学校朝食の時間をその子なりに満足して過ごせるように見つめ寄り添う姿勢で臨まれている。こうした活動の場のスタッフの役割には、朝食を提供するだけでなく、子どもの抱える課題や困難を必要な支援の方向へとつないでいく手がかりを見つけるなど、支援そのものも含めた支援の包括的な環境を創り出していくこと含まれていることが受け取れる。その役割に自覚的であるスタッフの意識も含めた取り組みへの姿勢を金子さんの子ども支援では大事にしながら、活動を支える環境づくりがなされているのである。

2-3-4 活動の再開や継続の難しさ

宇部市の小学校での学校朝食は、2020年3月の中断後、COVID-19への感染対策の生活からゆるやかに日常に戻りつつある2023年12月の時点でも再開には至っていない。それには、これらの活動を再開、継続するに至れない困難があることが推測される。例えば、学校朝食も市からの委託事業として行われているなど、活動の制度的資金的な支援に関係する行政との関係や活動を進める人の存在、活動に参加する子どもと保護者の実態などがあげられるが、平野さんの語りの中にもこうしたテーマが表れている。

ここでは、平野さんの語りに表れたものを手掛かりにこうした活動が広がりにくい要因に触れていく。

そうですね。そのとき私、担当じゃなかったんで、その辺の情報はあんまり詳しくはないんですけども、ただ担当の者から聞いたのは、申し込みをしたとしても、やっぱりご飯を食べられない、食べてこない子なんていないよとか、そんな困ってる子がいないよとか、そういうおじちゃん、おばちゃんたちがいて、なかなかガードが硬かったんで、中にポンと外部の者が行ってしまうことに対してやっぱり抵抗があったように思われましたね。そういうお話を聞きました。だけど少しずつそれが壁を崩すような形で、1個やったらまたもうここもやったからっていう形で、どんどん増えていきましたけれども。やっぱりお母さんたちが喜ばれてましたね。

子どもたちもちろん、アンケートにも書かれてると思うんですけども、朝ご飯は今日みんなで食べるんだよって言ったら、なかなか朝起きられない子がしっかり朝起きて学校に行きましたとか、…やっぱり朝ご飯をしっかりと食べるっていうのをこちらが言わなくても何かそういう機会を与えると、子どもたちって、自然にそういうふうにやってくれるんだよねっていうのがアンケートからでもわかったっていうことですけれども。

また、校長先生のカラーによって、受け入れられる受け入れられないっていうのがあって、たまたまH小学校は、そうやって金子先生の同級生のすごくいい先生、校長先生だったみたいなので。そういうわけで子どもたちがこういう朝ご飯を食べてるのも、もう外からこうやって、うふふ。

活動の開始時の困難は、小学校での学校朝食の必要性や意義について、行政や地域でいかに理解を得ていくかということから始まっている。それは、小学校という環境に外部から人が入ることへの抵抗や新しい取

り組みへの警戒とともに、子どもの取り巻く環境的課題や現実的困難な状況に目が向けられていないと思われる実態との距離の大きさなどであろう。しかしながら、実際に活動を行ったスタッフや学校朝食を受けた子どもの姿から保護者が直接的に何か感じるがあると、必然的に子どもが朝食を食べることの必要性や喜びなどが感じられるなどの能動的な姿へと導くことを可能にしており、このことは、この活動の成果として平野さんの語りの中でも実感されている。これは、こうした活動は、実際にその成果を感じる子どもや保護者を着実に広げていくことを地道にやっていくことが重要であるとも言えるだろうが、再開への難しさの側面であるとも言える。

一方で、やはりこうした活動を動かしていけるかどうかに関わる人に依るところが大きいことも当然ながら感じられている。あるいは、これは、金子さんの豊かな人脈も含めた人的資源の豊かさを生かされていることの人のつながりから環境を形作っていくことが重要であることということかもしれない。「**ただ、今スタッフの数がすごく減ってきているから、だから気持ち的には先生にあったとしても、これ以上スタッフにいろいろこれをしてあれをしてっていうのも…そういう部分で、先生もセーブしてると思います**」と、平野さんも語っているが、活動を広げることと、関わる人の理解や仕事の在り方、そして、人の確保の課題は、ここでも課題にもなっているようである。

2-4 宇部市の取り組みから見えたもの

ここでは、具体的な活動の状況を取り上げるに至っていないが、金子さんの子ども支援の活動は、学校朝食以外に、学童と学童昼食、子ども食堂やアウトリーチ型の宅食・宅配プロジェクト、学習支援や生活支援、パントリーや育児サポートなど、多角的に活動を展開されながら、必要な支援をつなぐゆるやかな循環を創り出すことで、子育て環境を社会や地域で育てていくことへと広げようとされているものである。

これは、実際に学校朝食を実施する上でも、金子さんのこれらの活動のいずれもが、学校朝食につながって、その活動実績や成果が生かされていることから伺える。例えば、子ども食堂での取り組みは、学校朝食の調理の環境から段取り、食材の確保からスタッフの動きなど、活動を実際に行うこと中で活かされており、スタッフの子ども支援に対する意識が、実際の支援の目的を豊かに支えたり、必要な援助の可能性を生み出したりしているように感じられたところからも見てとれる。そこから、また保護者への支援や子ども自身を支援していく環境（キッズラップなど）へと導くことも視野に入れて行われた活動でもある。

宇部市の活動を眺める限りは、学校朝食そのものは実質的に支援を必要とする子どもやその保護者に実質的なアプローチのできるとても有効な活動であると捉えられよう。それは、この度の活動が、金子さんの主導するこれまで時間をかけ工夫しながら作られてきた事業や、それが行える環境を持つ団体と平野さんのようなスタッフがあったからこそその成果であることは間違いない。今後、学校での学校朝食をいろいろな地域へと広げようとするならば、活動を支えるこれらの課題を越えていくことになるだろう。その際、この実践の成果は確かに生かされるものであると考える。

3. 岩国市での取り組み（関係者金本さんへのインタビューより）

本章では、数年にわたって岩国市で学校朝食を実践している NPO 法人とりでの理事長の金本さんへのインタビュー調査と、実際の学校朝食の様子の見学をもとに、この取り組みについての概要説明と分析を行う。

3-1 インタビュー調査の概略

3-1-1 認定 NPO 法人とりでについて

本節では、認定 NPO 法人とりでが手がける学校朝食について紹介する。とりでは、隣県との県境に在する岩国市で幅広い事業を展開している（図3 とりで機能図）¹⁶。学校朝食は、「とりでモーニング」と名づけられ、予防的機能のひとつに位置付けられている。

学校朝食の取り組みに関するインタビュー調査に応じてくれたのが、とりでの創設者であり理事長の金本秀韓さんである。金本さんは、社会福祉系の学部卒業と同時に社会福祉士を取得し、約 10 年のあいだ児童養護施設で児童指導員として勤務している。児童養護施設での最後の 2 年間、金本さんは児童家庭センターの相談員として勤務していたという。そのなかで、地域での家庭支援が喫緊の課題であることを痛感し、児童養護施設を退職、認定 NPO 法人とりでを設立したという。「**家におる間に親子でいる間にサポートしてい**

んと。なかなかその既存の組織を変えていくのってめちゃくちゃ難しいし時間かかるんで、もうゼロから作った方が早いって思って」と、金本さんは語る。その後の幅広い事業展開は、図3に示されているとおりである。法人設立から数年が経ち、事業と職員が増えた段階で、金本さんはケアリーバーのアフターケアに力を入れるようになる。その一環で地域にさらに目を向けるようになる。金本さんは次のように語る。「**校区外の子がいるんだったらその校区に作ればいい、みたいな感じで[子ども]食堂と塾の場所をちょっと増やしたりとか。コロナ禍の影響で集合型ができんから宅食を作ったりとか。朝食食べん子おるっていうんで、モーニングやったりとか。あとはホームが定員いっぱいってなったら2ホーム目作るとか。シンプルな[考え方で]。あと障害のある子が受け入れられんから放デイ[=放課後等デイサービス]作ったりです**」¹⁷。このように金本さんは、その都度必要だと思われる施設や事業を展開してきた。学校朝食の取り組みもそのひとつである。

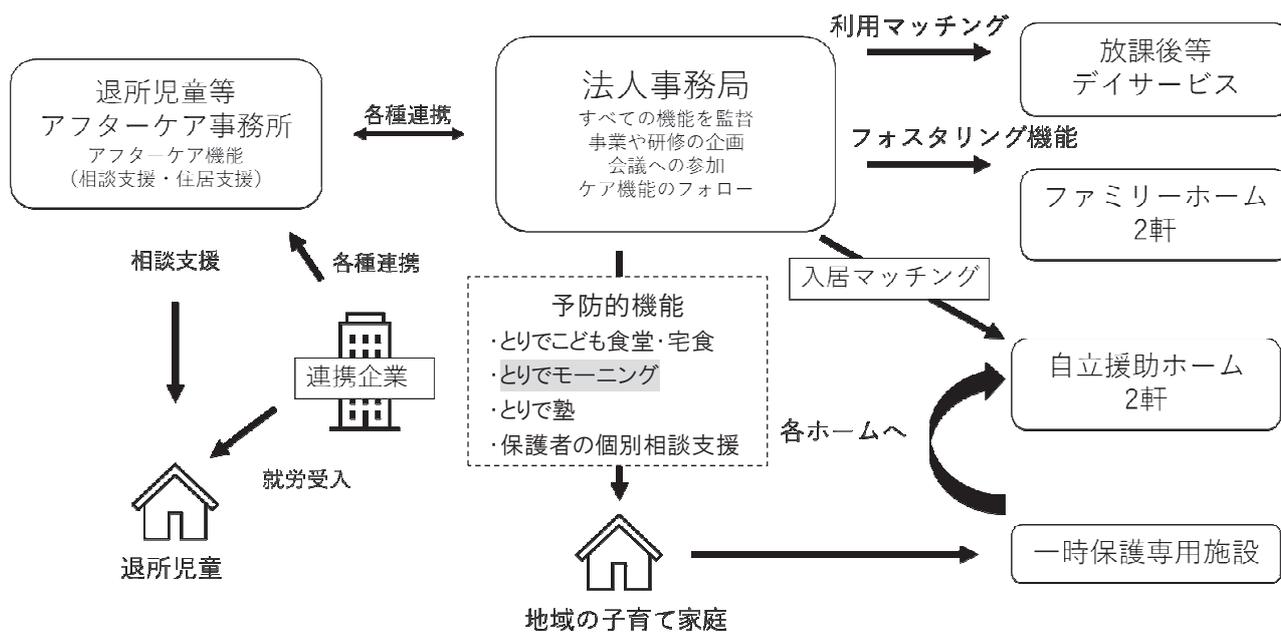


図3 とりで機能図

3-1-2 金本さんへのインタビューの方法

金本さんへのインタビュー調査は、認定NPO法人とりでが運営するファミリーホームの一室で実施した。調査の実施は、2023年の2月、時間は約1時間。事前に質問内容を策定し、半構造化面接の形を取りながら、自由に語ってもらう雰囲気、川崎・大塚の2名が行った。インタビュー内容は、金本さんの了解を得たうえで、手書きの記録とICレコーダーに録音し、後日、録音内容を逐語録として書き起こし、内容を整理、分析した。

3-1-3 倫理的配慮

金本さんには、インタビュー調査を行う前に、本研究についての説明と、研究への参加の同意を得ている

3-2 とりでモーニングについて

とりでモーニングと名づけられている朝食提供事業は、認定NPO法人とりでの所在地である岩国市と隣県の大竹市で月2回実施されている。認定NPO法人とりでの令和5年事業計画によると、岩国市では県営住宅の自治会集会所とD小学校の2か所で、大竹市では地域の集会所の1か所で実施されている。D小学校で実施されているとりでモーニングが、学校朝食の実践にあたる。とりでモーニングの対象者は、事業計画書によると「地域の子育て家庭の保護者とその子ども（小学生～高校生）」とされているが、学校朝食の場合には、当該小学校で登録した児童に限られる。

3-2-1 学校朝食実現までの歩み

学校外での朝食提供の実施は比較的スムーズであるのに対し、学校朝食の実現は困難を極めるという。その理由は、学校施設の警備の問題である。学校の建物は全館警備が敷かれているため、一部のエリアだけ警備を解くということが難しい。学校朝食は、教職員が通勤する前の早朝から準備を始める必要があり、施設管理に関する問題が生じる。現在は、学校教職員のワークライフバランスの重要性の観点から、学校教職員が早朝に出勤して警備システムを解除することは難しい¹⁸。

こうした状況のなか、D小学校での朝食提供が可能になったのは以下の理由からである。当時、D小学校の教員がボランティアとして認定NPO法人とりでの事業に参加しており、その教員の紹介で当時の校長から許可が得られた。さらに幸運なことに、D小学校は調理室が校舎とは別の建物にあり、当該の建物には警備がかかっていなかったため、実施場所もスムーズに決まった。教員のサポートのもと校長の許可を得ていたため、「**学校も全面協力で全校生徒にチラシを配ってくれるんで、めちゃくちゃ早く浸透しましたね**」と、金本さんは当時を振り返る。

3-2-2 予防的機能としての学校朝食

とりで機能図(図3)に示されているように、とりでモーニングは、子ども食堂/宅食、塾、保護者の個別相談支援と並び、予防的機能に位置付けられている。子ども食堂は休日の昼や平日の夜に開催されているが、そこに繋がれない子どもも多い。そこで金本さんは、平日の朝の学校朝食であれば、子ども食堂や宅食では取りこぼしてしまう子どもや家庭とも繋がれると考え、学校朝食の実現に動いたという。

あるケースでは、子どもが学校朝食に参加するようになったことをきっかけに保護者とも繋がることができ、その家庭はショートステイといった認定NPO法人とりでの他の事業も利用できるようになったという。

「朝ご飯が[食べられる]、っていうのも大事ですけど、そこで繋がって他の活動に[繋がれるようになる]、というのがすごく大事になってくるんで」。「例えば、D小のモーニングで繋がった子がそのままなんだろう。子供食堂にも来るしとか、小学校から中学校になっても何かとりで塾に来るとか、そういう形で、高校卒業まで来てくれますね。高校生になったら部活とかバイトとかで頻度は減りますが、高3の卒業間際でもだべりに来たりしてるって感じですけど」と、金本さんは語る。こうしたケースはまさに、とりでモーニングが予防的機能を果たした一例であると言えよう。

とりでモーニングが予防的機能を果たしうるよう、金本さんは、学校でチラシを配布してもらったあと、保護者とLINE¹⁹で繋がることを重視している。学校でチラシを配布してもらい、保護者とはLINEで繋がれば、前日にLINEでリマインドをすることができる。「**それやると全然人数違ってきます」「絶対取りこぼさないように」**利用者に個別にLINEを送り、「**未読が続いたら一回距離をおく**といった繊細な配慮を行うという。「**そういう、結構LINEを駆使して、LINEもですけどそういう個別な特別感みたいなのをいかに作れるかで、それが活動の継続性になると思うんですよ。なので一斉送信プラスアルファの部分っていうのをしますね**」と、金本さんは語る。

3-2-3 D小学校におけるとりでモーニング

「個別な特別感」は、実際のとりでモーニングでも展開されている。筆者らがD小学校におけるとりでモーニングを見学した際、朝食のメニューは、菓子パン/総菜パン、乳酸菌飲料、プリン/ヨーグルト、暖かいスープだった。パンに関しては、希望する子どもには個別対応をしているという。見学当日も、「俺の焼きそばパン」と言いながら自分のために準備された焼きそばパンを嬉しそうに食べている児童がいた。金本さんによれば、朝食のパンは、こうした個別対応のために、彼自身が前日にスーパーに行って購入しているそうである。

以上、本章では、山口県の岩国市における学校朝食の試みについて、担当者のインタビュー調査等に基づきその内実を紹介した。続く第4章では、本章で紹介した事例をふまえ、学校朝食の実践と継続の難しさと展望について考察する。

4. 学校朝食の実践と継続の難しさと展望

4-1 学校朝食の実現と継続の難しさ

2. と 3. では、山口県内の宇部市と岩国市における学校朝食の取り組みについて紹介した。1. でも触れたよ

うに、自分の家庭で朝食を食べることが難しい子どもたちが増えてきている現在、家庭外で朝食を提供する試みの重要性は徐々に認知されつつあると言えよう。事実、子ども食堂や集会所などでの朝食提供の試みは日本全国に広がりつつある。

他方で、平野さんと金本さんの語りから示されるように、学校朝食の試みとなると実現のハードルがかなり高くなるという現状がある。その理由としては、学校という場に外部の人間が入ることや新しい取り組みへの警戒感に加え、早朝に学校の警備システムを誰が解除するのかといった、学校教職員の働き方改革と関連する問題が挙げられる。また、2-3で触れたように、朝食を家庭で食べることができないといった現代の子どもが抱えている困難を、地域の人々が理解しづらい、という問題もある。宇部市での学校朝食の取り組みが、コロナ禍を理由に中止となり、アフターコロナの状況でも再開されないことから、上述の問題が根深いことがうかがえる。

1. で触れた先行事例や筆者らのインタビュー調査が示しているのは、教育委員会や学校長の下承が得られれば、学校朝食は実現可能だということである。しかし、教育委員会の職員、学校長や学校教職員は数年で異動あるいは退職するため、担当者を変更することで学校の方針が変わり、学校朝食が打ち切られてしまう場合も考えられる。ここに、学校朝食を継続していく難しさがある。

4-2 学校朝食の今後の展望

宇部市と岩国市双方の取り組みにおいて、学校朝食は、子ども食堂やアウトリーチ型の宅食・宅配プロジェクト、学習支援や生活支援、子育てサポート事業、ケアラー支援事業など、さまざまな子ども・子育て支援事業のひとつに位置付けられている。支援を必要とする子どもと家庭のあぶり出しや、彼らと繋がる入り口のひとつに位置付けられている。この意味で、学校朝食は、学校という場に様々な支援を一元化しようとする学校プラットフォームの構成要素として重要な役割を果たしうると言える。

2-3-2や2-4でも触れた小児科医の金子さんが展開されている学校給食から子ども食堂、アウトリーチ型の支援、学童を含む学習支援やパントリーなどの生活支援の他、第3の居場所事業や育児サポート事業など、それぞれの活動で支援を必要とする子どもとつながる可能性には常に意識を広げられている。また、3-2でも触れたように、金本さんの運営する認定NPO法人とりででは、学校朝食だけではなく、団地の集会所など、子どもたちが暮らす家の近くでも朝食提供を行っている。家の近くで朝食提供を実施する利点として、金本さんは、子どもの自宅まで言って参加を呼びかけることができること、保護者や地域のひとと一緒に朝食を食べられること、学校に行き渋る子どもを学校まで送り届けることができることなどを挙げていた。自宅近くの集会所だからこそ、朝食提供に繋がれる子どももいれば、学校で提供されているからこそ、学校朝食に繋がれる子どももいる。休日の昼に実施されている子ども食堂ならば繋がれる子どももいれば、平日の夜に実施されている子ども食堂ならば繋がれる子どももいる。支援を必要とする子どもと家庭と繋がる入り口のひとつとして、学校朝食は大事な役割を果たしうる。

最後に、本稿のインタビュー調査から見てきた、学校朝食を実現し、さらに継続し続けるために必要なことを挙げて本稿のまとめとしたい。一つ目は、学校朝食の必要性について行政や地域の方々に理解してもらうことである。学校朝食の必要性についての理解が深まれば、学校朝食を実現することも、担当者が変わって継続することも容易になると考えられる。二つ目は、宇部市でも岩国市でも学校朝食の利用者の満足度が高いことが語られていたことをふまえて、利用者の声を広く周知することで利用者を増やすことである。この試みが成功すれば、利用者だけでなく、行政や地域の方々の理解の深化にも繋がる。三つ目は、学校朝食を学校プラットフォームの構成要素として明確に位置づけ、学校組織の中に組み込むことである。そうすることで、「外部の人が一時的に学校に入り込んでくる」という学校教職員の警戒感を薄めることができる。

3. でも明示されていたように、学校朝食を実現する際の最も高いハードルは、学校の警備の問題である。警備システムの解除を「単なる部外者」ではなく、学校プラットフォームという「学校組織に組み込まれた部外者」が行うことによって、学校教職員の負担を増やすことなく教室を利用できるようになるだろう。

おわりに

本稿では、子どもの貧困対策として学校がプラットフォームとなる一つの要素とも考えられる学校朝食について、山口県内における二つの自治体での取り組みの実情を捉えることから検討を行ってきた。実際に実

践を行っている関係者へのインタビュー調査からは、学校朝食という取り組みが、子どもの生活支援としての一つの役割があるということや、子どもから保護者を含めた貧困対策への必要な支援へつなぐアプローチとしても可能性があることなどが伺えた。しかしながら、学校という場が学校を取り巻く地域における課題に対応する役割を担うには、学校施設の利用や管理に関する物理的なハードルや、教職員、行政、地域の方々への活動理解に関する心理的なハードルがまだまだあるということ、そして、それらに対応するためには活動を担う実践者と実践団体の力量など、活動を支えるための環境が重要であることなども捉えられた。

加速する子どもの貧困の問題に手の届く支援は、地道に進められている実践の中にその手がかりを見ることができると考えている。今後も引き続き、学校朝食を含めた子どもの支援の実態を追うことから、支援の実現ための具体的な方策についても考えていきたい。

謝辞

本研究に協力して下さった金子さん、平野さん、金本さんに、この場を借りて心よりお礼申し上げます。本論文は、JSPS 科研費 19KK0054 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))の助成を受けたものです。

引用文献

- 平田敦義 (2006) 「〈Ⅱ研究ノート〉アメリカにおける学校を中心とした子どもへのサービスを統合するプログラムに関する一考察：成立の背景を中心に」『教育学論集』筑波大学大学院人間総合科学研究科教育学専攻, pp. 105-121.
- 勝野正章 (2019) 「学校は「子どもの貧困対策のプラットフォーム」になりうるのか」『日本教育政策学会年報』第 26 号, pp. 100-108.
- 山野則子 (2018) 『学校プラットフォーム：教育・福祉、そして地域の協働で子どもの貧困に立ち向かう』有斐閣.

注

- 1 「学校プラットフォーム」という表記は山野 (2016, 2018) に準じる。
- 2 「子供の貧困対策に関する大綱」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2014/10/01/1352204_3_2.pdf (2023 年 12 月 11 日最終確認) なお、この大綱は、子供の貧困対策の推進に関する法律 (2014 年 1 月施行) に基づき、およそ 5 年ごとに見直しが検討されることになっている。直近では、2019 年に見直しが実施された。
- 3 全国学校朝食クラブプログラムの概要はこちら (2023 年 12 月 11 日最終確認)
<https://www.gov.uk/guidance/national-school-breakfast-club-programme>
- 4 Extended schools and services の一環として、当該の小学校では、午前 10 時頃にすべての児童に対しておやつが提供されていた。筆者らが見学した日のおやつは、大きなボウルに入った人参だった。おやつを食べたい児童は、そのボウルから各自自由に取って食べる仕組みになっている
- 5 以下、本文での記述は、勝野 (2019) と平田 (2006) を参考にしている。
- 6 令和 3 年度全国学力・学習状況調査結果資料
<https://www.nier.go.jp/21chousakekkahoukoku/index.html> (2023 年 12 月 11 日最終確認)
- 7 ニューズウィーク日本版「「朝ごはんを、こども食堂で」子どもの朝食欠食、孤食問題解決を目指す日本ケロッグの取り組み」 (2023 年 11 月 28 日配信) (2023 年 12 月 11 日最終確認)
https://www.newsweekjapan.jp/stories/sdgs/2023/11/post-103124_1.php
- 8 子ども食堂カフェ北野ウェブサイト <https://www.cafekitano.com/> (2023 年 12 月 11 日最終確認)
- 9 湯浅誠「学校で朝ごはん 食べてそのまま教室へ ばあちゃんたちの奮闘記・大阪」 (2018 年 4 月 25 日配信) (2023 年 12 月 11 日最終確認)
<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/76a5a22d58d82f6e41f0f0d4ffd7bb1f01bd5b4e>

- 10 朝日新聞デジタル「子どもの朝食、学校で地域で ボランティアがサポート」 (2019年2月21日配信) (2023年12月11日最終確認) <https://www.asahi.com/articles/ASM273HCXM27PTFC009.html>
- 11 読売新聞オンライン「小学校が朝食を週2回無償提供、1日当たり60~80人利用…地域から支援求める要望」 (2023年6月17日配信) (2023年12月11日最終確認)
<https://www.yomiuri.co.jp/national/20230613-0YT1T50049/2/>
- 12 現在この試みが継続しているかを確認することはできなかった。
- 13 NPO法人だんだん・ばあのウェブサイト参照のこと。(2023年12月11日最終確認)
<https://dandanbar.jimdofree.com/>
- 14 日本教育新聞Nikkyoweb「朝食を学校で:「朝ごはんカフェ」を実施する」(2022年10月30日配信)(2023年12月11日最終確認) <https://www.kyoiku-press.com/post-250477/#>
- 15 神奈川県ウェブサイト「県立高校における朝食提供事業の実施」2023年12月11日最終確認。
<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/en7/230206.html>
- 16 図3は認定NPO法人とりでのウェブサイト参考に筆者が作成。とりでモーニングの強調は筆者による。
- 17 引用文中の〔 〕は筆者による補足である。以下同様。
- 18 山野によれば、学校に支援機能を一元化しようとする学校プラットフォームの考え方に対する批判も多いという。その理由は、「学校=教師であるとの認識から、多忙な教師にとっては、仕事がさらに増えるという懸念に基づくものである。しかし、学校プラットフォームはあくまでも学校の機能にかかわる話であって、教師の機能の話はどこにも書かれていない」と山野は指摘する(山野2018, p.5)。学校朝食がなかなか実現しない、あるいは、前節で指摘したように継続が難しいことの理由のひとつがここにある。
- 19 スマートフォンやPCで利用できるSNSアプリの一種。